

2010 年度

関西福祉科学大学大学院

社会福祉学研究科

心理臨床学専攻

修士論文題目

大学生におけるアイデンティティの確立について
—心理的居場所と情動との関係性から—

指導教員（栗村昭子）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 20961013 氏名 吉川満典

目次

第1章	序論	1
1.	アイデンティティとは	1
2.	居場所とは	2
3.	情動知能とは	2
第2章	目的	4
第3章	方法	5
1.	調査対象者	5
2.	調査時期	5
3.	調査手続き	5
4.	調査内容	5
5.	分析方法	7
第4章	結果と考察	8
1.	居場所の有無とアイデンティティの各尺度との関係について	8
2.	居場所の有無とその特徴などとの関係について	8
3.	居場所の有無と情動知能との関係について	10
4.	居場所の有無と時間的連続性との関係について	11
5.	アイデンティティと各尺度との関係について	11
6.	アイデンティティの確立に影響を与える要因について	14
7.	アイデンティティの基礎に影響を与える要因について	16
8.	アイデンティティの確立との関係性のつながりについて	17
9.	アイデンティティの基礎との関係性のつながりについて	19
第5章	総合考察	20
第1節	本研究のまとめ	20
第1項	アイデンティティと居場所との関係から	20
第2項	情動知能との関係から	20
第3項	時間的連続性との関係から	21
第2節	今後の展望と課題	22
要約		23
謝辞		24
引用・参考文献		25
資料		

第1章 序論

1. アイデンティティとは

アイデンティティの形成と確立は、青年期における発達課題として世界中で認識されてきた。

Erikson (1953) によると、青年期は技術の世界や新しい技術を教え分かち合う人々との良い関係が確立されることによって始まる。また、自我同一性の感覚 (a sense of ego identity) とは、内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験から生まれた自信のことである。それぞれの主要な危機の終りにこのようにして確証された自己評価 (self esteem) は、確かな未来に向かっての有効な歩みを今自分は学びつつあるという確信に、つまり、自分が理解している社会的現実の中にはっきり位置づけできるようなパーソナリティを自分は発達させつつあるという確信に成長してゆくと言われる。

また、Erikson ら (1997) によると、同一性形成の過程は徐々に生成するゲシュタルト (evolving configuration) として現れてくる。それは生まれつきの体質、独自のリビドー欲求、恵まれた才能、種々の重要な同一化、有効な防衛、効果的な昇華及び一貫した諸役割を徐々に統合する一つのゲシュタルトである。しかしこれらは全て、個人の潜勢力と技術的な世界観と宗教的または政治的なイデオロギーの相互の適応の中から初めて現れてくるものとされている。

また、アイデンティティが確立する過程では、自分が選択した役割やイデオロギーなどにエネルギーを傾倒 (commitment) することによって「忠誠心」という人格的活力も発達するとされる。アイデンティティの形成は、生涯に渡って続く無意識的な過程ではあるが、青年期はその確立に向けての意識的な努力が始まる時期なのである。

以上のように、Erikson はアイデンティティの形成と確立を青年期から始まる発達課題としている。その一方で、我が国では多くの研究者から青年期の遷延化が指摘されてきた。例えば、以下のような指摘がある。

安香 (1979) は、社会機構の複雑化と医術の進歩による老齢化が進む一方の現代文明社会では、身体的成熟を遂げた人間が直ちに一人前の社会生活を営める成人に成りえないことは明白であるとした。また、文明の進歩が成人期の開始を遅らせ、青年期を長くしていると指摘している。

また、小此木 (1978) は、我が国では青年期の発達の様相が異なることを指摘し、日本特有のモラトリアムを概念化している。小此木は、若者文化の出現と青年期の延長という現代社会の構造の中で変容した青年の心理を新しいモラトリアム心理と呼んだ。また、旧来の伝統的な猶予構造の中で成立した青年の心理と新しいモラトリアム心理の特徴の相違は、「半人前意識から全能感へ」「禁欲から開放へ」「修業感覚から遊び感覚へ」「同一化 (継承者) から隔たり (局外者) へ」「自己直視から自我分裂へ」「自立への渴望から無意

識・しらせへ」である。

以上のように、我が国の青年期は、Erikson が記述したものとは異なる発達の様相を呈していることが指摘されてきた。ところが、下山（1992）によると、新しいモラトリアム心理の特徴を対象とした実証的研究はこれまでほとんどなされていないのが現状である。しかし、その一方で、青年期の多くの時間が「学生」として過ごされるために、青年期の自己形成において、学校を含めた「居場所」の研究がされるようになってきた。

2. 居場所とは

居場所という概念の定義は、その研究領域や研究者ごとによって様々ではあるが、都筑（1998）が述べているように、物理的状況と心理的要因の双方から考察されるとする点でその見解は共通している。

また、青年期の自己形成の場としての居場所の研究がおこなわれてきている。白井（1998）は、大学生らへの調査によって、居場所を、「受容される居場所」「1人になれる居場所」「成長できる居場所」「安心できる居場所」に分類している。また、小沢（1998, 2002, 2003）は、現象学的アプローチから、居場所とは生き生きと生きるために必要なものであり、私が私であることを確認し実感するためのものでもあるとした。

さらに、精神分析の立場からは、北山（1993）が以下のように説明している。すなわち、居場所とは自分が自分であるための環境のことであり、「本当の自分」があるためには、環境から自らの分としての居場所が与えられていることがその出発点となる。また、思春期や青年期などの移行期は、自分の分裂を防ぐ自我の機能が問われやすい時期であり、それまでに鍛えられているはずの移行能力が問われることになるが、それに失敗すると、「居場所がない」「自分がない」という自分の困難が出現または露呈する。そして、「自分がない」とは、一貫した自分がないという意味で使用されており、アイデンティティ論におけるアイデンティティ拡散の状態として理解することが有効な時もあるとされている。

以上のように、居場所は青年の自己形成の場としても研究されており、アイデンティティ論との関係も説明されている。さらに、その一方で、アイデンティティの獲得には対人関係能力も必要となる。コミュニケーション能力が特に重視される現代社会においては、対人関係能力である情動のコントロールすなわち情動知能が密接な関係をもつだろう。

3. 情動知能とは

情動知能（emotional intelligence）とは、知能をより包括的に多面的に捉えようとする研究から提唱された概念であり、知能全体の中の情動的な側面を捉えるものとして注目されている。

情動と思考の相互間での影響が注目されるようになったのは 1970 年頃からであり、これまでに多くの研究者によって社会的知能として定義が試みら

れてきた。Gardner (1983) は、多重知能という理論を提唱しており、対人関係知能というものを定義したが、その多くの側面には情動を知覚し、象徴化する能力が含まれていることから、これは情動知能の先駆的研究とされている。

また、認知科学の分野でも、認知 (cognition) と情動 (emotion) の相互作用に関する多くの研究が行われており、人間の様々な活動において、感情が重要な役割を果たしていることが明らかにされてきた。

Mayer ら (1997) によると、情動知能は、情動を知覚すること、思考を助けるために利用し作り出すこと、情動と情動の知識を理解すること、情動的知的な成長を促すように情動を制御することと定義されている。

情動知能の概念や定義は研究者の主張によって様々である。また、情動知能を測定するための評価尺度はこれまでに多くの研究者によって開発されているが、それらの概念の中心軸には、Gardner (1983) が提唱しているように対自己 (intrapersonal intelligence) と対他者 (interpersonal intelligence) という 2 つの能力が使用されてきた。

さらに、内山ら (2001) は、情動知能の概念には自分や他者との関係だけではなく状況に対応するための能力が含まれているとしており、自己と対人という従来の対象領域に状況を加えることによって、EQS (emotional intelligence scale) という情動知能尺度を開発した。EQS では、情動知能の対象領域として、「自己対応」「対人対応」「状況対応」が定義されており、それぞれの領域ごとにその対応因子が設定されている。すなわち、自己対応には、「自己洞察」「自己動機づけ」「自己コントロール」、対人対応には、「共感性」「愛他心」「対人コントロール」、状況対応には、「状況洞察」「リーダーシップ」「状況コントロール」である。EQS の特徴は、情動知能を「情動」「認知」「行動」という幅広い側面から包括的に捉えられるように開発されているところにあり、信頼性と妥当性も様々な角度から検討されている。

第2章 目的

青年期の多くの時間が「学生」として過ごされることから、青年期の自己形成の研究において、学校を含めた「居場所」の研究がされるようになってきた。青年期における自己形成に「居場所」がどう関わっているかを調べるためには、青年期の発達課題であるアイデンティティの獲得との関係を見る必要があると思われる。また、アイデンティティの獲得には、対人関係能力が必要となる。コミュニケーション能力が特に重要視される現代社会においては、対人関係能力である情動のコントロール、すなわち情動知能が、アイデンティティの獲得に密接な関係をもつだろう。従って本研究では青年期の発達課題であるアイデンティティの獲得が、居場所とどのように関係しているのか、また、それらが情動知能とどのように関係しているのかを調べることを目的とする。これらの関係を見ることによって、青年期の大学生がどこでアイデンティティを獲得するのか、そこに情動知能というコミュニケーション能力と密接に関わるものがどのように関係しているのかを明らかにすることができると思う。

第3章 方法

1. 調査対象者

大阪府下の四年制大学の学生に調査を実施した。回答が得られた 296 名のうち、もれなく回答した 203 名（男性 59 名，女性 144 名，平均年齢 20.29 歳，SD=1.14）のデータを分析対象とした。有効回答率は 68.6%であった。

2. 調査時期

2010 年 7 月から 9 月にかけてである。

3. 調査手続き

大学の講義時間を使用して無記名の調査用紙を配布し，その場で回収する形式をとっており，個人データが特定できないように配慮した。また，倫理的配慮として，調査の協力は任意であり，回答を拒否できることを口頭によって伝えた。

4. 調査内容

(1) アイデンティティ尺度

先述したように，アイデンティティ尺度は，小此木（1978）が指摘した新しいモラトリアム心理と大学生のアイデンティティの確立度との関連性を検討するために，下山（1992）が開発した心理尺度であり，「アイデンティティの確立」と「アイデンティティの基礎」という 2 つの尺度から構成されている。また，「アイデンティティの確立」尺度は，自己の主体性や自己への信頼が形成されているかどうかを測定するためのものであり，「アイデンティティの基礎」尺度は，自己の安定が得られずに不安や孤独におそわれる気持ちを測定するものである。本尺度は 20 の質問項目から構成されている。回答は 4 件法で求め，各項目への回答に対して 1～4 点が与えられる。

(2) 居場所条件尺度

先述したように，居場所条件尺度は，居場所の物理的状況と心理的要因を検討するために，白井（1998）が開発した心理尺度であり，居場所の有無を尋ねたうえで，それらに求められる特徴を「現実」と「理想」という 2 つの側面から捉えられるように構成されている。また，居場所は，「受容される居場所」「1 人になれる居場所」「成長できる居場所」「安心できる居場所」に分類されている。「受容される居場所」は，自分の本音を出せて，ありのままの自分が認められ，本気になってくれる人がいる居場所であり，「1 人になれる居場所」は，ホッと一息つける居場所であり，「成長できる居場所」は，同じ目標を持ち，一緒に成長できる人がいる居場所であり，「安心できる居場所」は，心を癒してくれる人がいる居場所のことである。本尺度は 22 の質問項目から構成されている。回答は 5 件法で求め，各項目への回答に対して 1～5

点が与えられる。

(3) EQS

先述したように、EQSは、情動知能を測定するための評価尺度として、内山ら（2001）が開発した心理尺度であり、「自己対応」「対人対応」「状況対応」という対象領域から情動知能の概念を捉えており、それぞれの対象領域には、その対応概念として3つの対応因子が設定されている。なお、対象領域と対応因子が持つ意味については、表1に示した。本尺度は65の質問項目から構成されている。回答は5件法で求め、各項目への回答に対して0～4点が与えられる。

表1 情動知能の対象領域と対応因子

I	<u>自己対応</u>
	もっぱら自己の心の働きについて知り、行動を支え、効果的な行動をとる能力。
1.	自己洞察：自己の感情状態を知ることができ、また自己の感情表現力についても分かっていること。
2.	自己動機づけ：自己の行動を目標達成に向けて維持するための動機的能力。
3.	自己コントロール：自分の行動を自分で調整する能力。
II	<u>対人対応</u>
	他者の感情に関する認知や共感をベースに、他者との人間関係を適切に維持することのできる能力。
4.	共感性：他者の感情状態を知り、その感情に応じて適切な感情反応を起こす能力。
5.	愛他心：他者を思いやる気持ち。
6.	対人コントロール：他者の能力を生かす力、えり好みせずに人間関係を作る力、自分の利益を後回しにする力。
III	<u>状況対応</u>
	集団を取り巻く状況の変化に耐える力、リーダーシップ、また状況に応じて能力を使い分ける統制力。
7.	状況洞察 悲観的にならず、変化する状況の意味を正確に理解し、適切に対処する能力。
8.	リーダーシップ：適切な状況判断に基づいて集団を動かす能力。
9.	状況コントロール：状況の適切な認識に基づいて臨機応変の処置ができ、また自分を変えていくことができる能力。

(4) 時間的連続性尺度

時間的連続性尺度は、大学生がどれぐらい先までの時間的連続性上に自己を位置づけられているのかを測定するものであり、少し先の未来に自己を位置づけられる能力の有無を見るために、独自に作成した心理尺度である。本尺度は一つの質問項目だけで構成されており、「あなたは、何年後の自分まで想像できますか。次の()のなかに記入してください。」と教示し、「()年後の自分までは想像できる。」という質問文で示されている。

5. 分析方法

分析においては、① t 検定によって、居場所が「ある」「どちらかといえばある」と回答した者と居場所が「どちらかといえはない」「ない」と回答した者の各尺度得点の平均値の差を分析することによって、居場所の有無が各尺度得点に与える影響を比較する。② Pearson の積率相関係数を算出して、各尺度の相関関係を分析する。③ 重回帰分析による偏回帰係数の検定をすることによって、「アイデンティティの確立」尺度に影響を与えている各尺度の要因を分析する。④ 共分散構造分析によって、「アイデンティティの確立」尺度と各尺度との関係性のつながりを分析し、アイデンティティを獲得するためのモデルとなる図を作成する。

第4章 結果と考察

1. 居場所の有無とアイデンティティの各尺度との関係について

まず、アイデンティティ尺度によって、各下位尺度の得点を出した。アイデンティティの確立度である「アイデンティティの確立」と、アイデンティティの基礎となる気持ちの程度である「アイデンティティの基礎」を測定した。結果、「アイデンティティの確立」が平均 2.63 点、SD=0.51 であり、「アイデンティティの基礎」が平均 2.14 点、SD=0.51 であった。

それに併せて、居場所が「ある」「どちらかといえばある」と回答した者（以下、居場所のあるもの）と居場所が「どちらかといえばない」「ない」と回答した者（以下、居場所のないもの）とで、アイデンティティの確立、基礎のそれぞれにおいて差があるかどうかを比較検討した。それを表 2 に示す。表から分かるように「アイデンティティの確立」と「アイデンティティの基礎」どちらの尺度においても、居場所の有無によって 0.1%水準で有意な差がみられた。

表2 居場所の有無と、アイデンティティの各尺度得点の比較

	居場所のあるもの(N=187)		居場所のないもの(N=16)		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
アイデンティティの確立	2.68	0.49	2.07	0.44	-4.84 ***
アイデンティティの基礎	2.18	0.50	1.69	0.47	-3.81 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

以上のことから、居場所のあるものは、居場所のないものと比較して有意にアイデンティティを確立しており、また、アイデンティティの基礎となる気持ちも持っていることが示唆された。

2. 居場所の有無とその特徴などとの関係について

次いで、居場所条件尺度によって、居場所の有無を尋ねたところ、居場所が「ある」と回答したのは 54.2%、「どちらかといえばある」は 37.9%、「どちらかといえばない」は 5.9%、「ない」は 2.0%であった。

それに併せて、居場所のあるものにはそれぞれが居場所としているところを尋ねた。その結果を表 3 に示した。表のとおり、「友人」「家族」「自分の部屋」の順で回答が多くなっている。ところが、最も重要な居場所を尋ねたところ、「友人」と回答する割合は減少しており「家族」が増加した。9.の回答には、「空き教室」「図書館」「公園」「ゲームセンター」「繁華街」「布団の中」「PCの前」「ジョギング中」「お風呂」「カフェ」があり、10.の回答においては、「ライブハウス」「バンド」があった。

また、現実を持っている居場所と理想としている居場所との隔たりを見るために、現実の居場所の特徴（現実）と理想とする居場所の特徴（理想）について調べた。なお、「居場所のあるもの」に対しては、上記の二つについて

尋ねたが、「居場所のないもの」については後者だけを尋ねた。そして、理想とする居場所については、それぞれの平均値の差を比較した。その結果を表4と5に示す。表から分かるように「成長できる居場所」で0.1%水準の有意差がみられ、「受容される居場所」「1人になれる居場所」で1%水準の有意差がみられた。

表3 居場所としてしているところ (N=187)

	居場所 (複数回答可)	最も重要な居場所 (1つだけ)
1. 友人	143 (76.4)	30 (16.0)
2. 家族	137 (73.3)	43 (23.0)
3. 自分の部屋	124 (66.3)	20 (10.7)
4. 家 (家族と自分の部屋以外)	62 (33.2)	3 (1.6)
5. 学校	62 (33.1)	1 (0.5)
6. クラブ・サークルなどの団体	49 (26.2)	5 (2.7)
7. 恋人	44 (23.5)	11 (5.9)
8. バイト先	32 (17.1)	1 (0.5)
9. 自分の部屋以外で1人になれるところ	11 (5.8)	1 (0.5)
10. その他	3 (1.6)	1 (0.5)
11. 無回答		71 (38.1)

※数値は回答者数であり、()内は%である。

表4 現実の居場所の種類

	居場所のあるもの(N=187)	
	平均値	SD
受容される居場所	3.62	0.57
1人になれる居場所	3.13	0.85
成長できる居場所	3.65	0.72
安心できる居場所	3.07	0.65

表5 居場所の有無と、理想の居場所得点の比較

	居場所のあるもの(N=187)		居場所のないもの(N=16)		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
受容される居場所	4.02	0.57	3.58	0.78	2.92 **
1人になれる居場所	3.19	0.84	3.84	0.76	-3.01 **
成長できる居場所	4.04	0.74	3.38	0.91	3.40 ***
安心できる居場所	3.20	0.73	3.28	0.60	-0.42

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

以上のことから、居場所のあるものは、居場所のないものと比較して有意に「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった対人交流が求めら

れるような居場所を理想としており、また、現実にもそれらの居場所を持っていることが示唆された。そして、居場所のないものは、「1人になれる居場所」といった対人交流が求められないような居場所を理想としていることが示唆された。

3. 居場所の有無と情動知能との関係について

次いで、EQSによって、情動知能を構成する能力や技能を測定した。その結果を表6に示した。

それに併せて、居場所のあるものと居場所のないものの平均値の差を比較した。その結果を表7に示す。表から分かるように、対象領域では、「対人対応」「状況対応」で0.1%水準の有意差がみられ、「自己対応」で1%水準の有意差がみられた。次に、対応因子では、「愛他心」「対人コントロール」「状況洞察」で0.1%水準の有意差がみられ、「共感性」「状況コントロール」で1%水準の有意差がみられ、「自己洞察」「自己動機づけ」「自己コントロール」「リーダーシップ」で5%水準の有意差がみられた。

表6 大学生の情動知能(N=203)

	平均値	SD
自己対応	2.06	0.70
自己洞察	1.96	0.79
自己動機づけ	2.37	0.84
自己コントロール	1.92	0.77
対人対応	2.16	0.69
共感性	2.62	0.86
愛他心	2.44	0.81
対人コントロール	1.66	0.76
状況対応	1.70	0.81
状況洞察	1.94	0.82
リーダーシップ	1.31	0.97
状況コントロール	1.73	0.94

表7 居場所の有無と、情動知能得点の比較

	居場所のあるもの(N=187)		居場所のないもの(N=16)		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
自己対応	2.09	0.70	1.62	0.52	2.65 **
自己洞察	2.00	0.78	1.48	0.70	2.56 *
自己動機づけ	2.40	0.83	1.92	0.85	2.25 *
自己コントロール	1.95	0.78	1.51	0.51	2.21 *
対人対応	2.21	0.68	1.53	0.52	3.91 ***
共感性	2.67	0.85	2.03	0.80	2.90 **
愛他心	2.49	0.80	1.82	0.67	3.23 ***
対人コントロール	1.72	0.75	1.01	0.54	3.71 ***
状況対応	1.76	0.81	1.06	0.59	3.37 ***
状況洞察	2.00	0.81	1.24	0.62	3.70 ***
リーダーシップ	1.36	0.97	0.77	0.73	2.35 *
状況コントロール	1.78	0.95	1.08	0.66	2.89 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

以上のことから、居場所のあるものは、居場所のないものと比較して有意に情動知能を構成する能力や技能を持っており、「対自己」「対他者」「対状況」における情動の知覚、情動と情動の知識の理解、情動的知的な成長を促すような情動の制御ができていたことが示唆された。そして、居場所のないものは、「1人になれる居場所」といった対人交流が求められないような、むしろ他者などの環境から避難する場所としての居場所を理想としていたが、高くはない情動知能との関係も伺えた。

4. 居場所の有無と時間的連続性との関係について

次いで、時間的連続性尺度によって、大学生がどれぐらい先までの時間的連続性上に自己を位置づけられているのかを測定し、少し先の未来に自己を位置づけられる能力の有無を見た。その結果は、平均年数 4.95 年、SD=10.39 であった。

また、居場所のあるものと居場所のないものの平均値の差を比較した。その結果は、 $t=.132$ であり有意差はみられなかった。また、居場所のあるものは平均年数 4.98 年、SD=10.45 であり、居場所のないものは平均年数 4.63 年、SD=9.93 であった。

以上のことから、居場所のあるものと居場所のないものは、ほぼ同程度の時間的連続性上にあることが示唆されたが、各尺度との関係を分析することによって、それぞれの位置づけの特徴を検討することとする。

5. アイデンティティと各尺度との関係について

(1) 居場所のあるものの場合

居場所のあるもののアイデンティティ尺度と各尺度間の相関関係を分析するために Pearson の積率相関係数を算出した。また、居場所については、今実際に持っている居場所（現実）と理想とする居場所（理想）が分析対象である。結果は表 8 に示したが、 $r=.4$ 以上の相関関係がみられたものは次のとおりであった。

まず、「アイデンティティの確立」尺度との間では、「アイデンティティの基礎（ $r=.407$ ）」「自己洞察（ $r=.531$ ）」「自己動機づけ（ $r=.506$ ）」「自己コントロール（ $r=.535$ ）」「対人コントロール（ $r=.440$ ）」「状況洞察（ $r=.577$ ）」「リーダーシップ（ $r=.517$ ）」「状況コントロール（ $r=.581$ ）」で $r=.4$ 以上の相関関係がみられた。

次に、「アイデンティティの基礎」尺度とは、「アイデンティティの確立（ $r=.407$ ）」「対人コントロール（ $r=.400$ ）」「状況コントロール（ $r=.488$ ）」と同様であった。

なお、理想とする居場所（理想）とアイデンティティ尺度との関係については、今実際に持っている居場所（現実）と同様である。

以上のことから、「アイデンティティの確立」尺度とは、EQS の対象領域である「自己対応」「状況対応」との間で $r=.4$ 以上の強さの相関関係がみ

られた。「自己対応」とは、もっぱら自己の心の働きについて知り、行動を支え、効果的な行動をとる能力のことであり、「状況対応」とは、集団を取り巻く状況の変化に耐える力、リーダーシップ、状況に応じて能力を使い分ける統制力のことである。青年期後期には、サポートを提供する外的な対象（他者）への依存が減少することによって、「自我感情」や「自己評価」が安定してくるとされる。また、自我感情とは自己と自己表象とのずれあるいは一致の程度であり、人間は生涯にかけて懸命に環境と関わりこの一致を追及するという。「自己対応」「状況対応」といった、自己を効果的に調整する能力や状況を正確に認識して適切に対処する能力は、自我感情の追求あるいはアイデンティティの獲得の過程とも関係していることが考えられた。また、EQSの「対人対応」の領域については、「対人コントロール」としか相関関係はみられなかったが、外的な対象（他者）への依存を減少させていく過程にあるためではないかということが伺われた。

また、「アイデンティティの基礎」尺度とは、EQSの「対人対応」「状況対応」の対応因子である「対人コントロール」「状況コントロール」との間でしか相関関係はみられず、「自己対応」とは関係がみられなかった。これについては、アイデンティティの基礎となる自己の安定が得られずに不安や孤独におそわれる気持ちは、自我感情が一致する以前の段階のものであるためではないかということが考えられた。しかし、「自己対応」や「状況対応」に含まれる他の能力が向上することによって、自我感情の一致あるいはアイデンティティの獲得に移行していく可能性があることも考えられた。

表8 アイデンティティと各尺度との相関関係(N=187)

	アイデンティティ尺度	
	アイデンティティの確立	アイデンティティの基礎
アイデンティティ尺度		
アイデンティティの確立		.407 **
アイデンティティの基礎	.407 **	
居場所条件尺度		
受容される居場所(現実)	.353 **	.337 **
1人になれる居場所(現実)	-.188 *	-.310 **
成長できる居場所(現実)	.308 **	.284 **
安心できる居場所(現実)	.092	.048
受容される居場所(理想)	.183 *	.097
1人になれる居場所(理想)	-.076	-.265 **
成長できる居場所(理想)	.287 **	.124
安心できる居場所(理想)	-.053	-.122
EQS		
自己洞察	.531 **	.342 **
自己動機づけ	.506 **	.227 **
自己コントロール	.535 **	.256 **
共感性	.387 **	.163 *
愛他心	.166 *	-.042
対人コントロール	.440 **	.400 **
状況洞察	.577 **	.374 **
リーダーシップ	.517 **	.375 **
状況コントロール	.581 **	.488 **
時間的連続性尺度		
時間的連続性	.248 **	.112

※数値はPearsonの積率相関係数である。**p<.01, *p<.05

(2) 居場所のないものの場合

居場所のないもののアイデンティティ尺度と各尺度間の相関関係を分析するために Pearson の積率相関係数を算出した。また、居場所については、居場所（理想）のみが分析対象である。結果は表 9 に示したが、 $r = .4$ 以上の相関関係がみられたものは次のとおりであった。

まず、「アイデンティティの確立」尺度との間においては、「成長できる居場所 ($r = .429$)」「安心できる居場所 ($r = -.634$)」「自己コントロール ($r = .422$)」「対人コントロール ($r = .455$)」「状況洞察 ($r = .431$)」「リーダーシップ ($r = .558$)」「状況コントロール ($r = .429$)」で $r = .4$ 以上の相関関係がみられた。

次に、「アイデンティティの基礎」尺度との間では、「対人コントロール ($r = .400$)」「状況洞察 ($r = .400$)」「リーダーシップ ($r = .536$)」で同様であった。

表9 アイデンティティと各尺度との相関関係(N=16)

	アイデンティティ尺度	
	アイデンティティの確立	アイデンティティの基礎
アイデンティティ尺度		
アイデンティティの確立		.312
アイデンティティの基礎	.312	
居場所条件尺度		
受容される居場所(理想)	-.041	-.286
1人になれる居場所(理想)	-.338	-.188
成長できる居場所(理想)	.429	-.172
安心できる居場所(理想)	-.634 **	-.258
EQS		
自己洞察	.328	-.119
自己動機づけ	.300	.008
自己コントロール	.422	.216
共感性	.272	-.029
愛他心	.018	-.344
対人コントロール	.455	.400
状況洞察	.431	.400
リーダーシップ	.558 *	.536 *
状況コントロール	.429	.366
時間的連続性尺度		
時間的連続性	.103	-.146

※数値は Pearson の積率相関係数である。また、**印は1%水準で有意(両側)、*印は5%水準で有意(両側)である

以上のことから、「アイデンティティの確立」尺度とは、「成長できる居場所」との間で $r = .4$ 以上の強さの正の相関関係がみられ、また、「安心できる居場所」との間で負の相関関係がみられた。「成長できる居場所」とは、同じ目標を持ち、一緒に成長できる人がいる居場所であり、「安心できる居場所」とは、心を癒してくれる人がいる居場所のことである。「成長できる居場所」といった、お互いに成長し合えるような居場所を欲することは、青年期後期における自我感情の追求あるいはアイデンティティの獲得との関係においては必然であるのかもしれない。しかし、「安心できる居場所」といった、心を

癒してくれる人がいるような穏やかさのある居場所は、疾風怒濤の時期ともいわれる青年期後期には求められておらず、むしろ、成人期以降に求められる居場所ではないかということが考えられた。また、居場所のあるものとの相違点としては、EQSの「自己対応」の領域における「自己洞察」「自己動機づけ」との間で相関関係がみられなかったことがあげられる。「自己洞察」とは、自己の感情状態を知ることができ、また自己の感情表現力についても分かっていることであり、「自己動機づけ」とは、自己の行動を目標達成に向けて維持するための動機的な力のことである。居場所のないものは、居場所のあるものと比較して、「自己洞察」「自己動機づけ」といった、自己の感情状態を理解するとともに適切に表現できる能力や目標達成に向けて自己の行動を維持できる能力が高くはないことが示唆された。

また、「アイデンティティの基礎」尺度では、居場所のあるものとの相違点として、「状況対応」の領域における「状況洞察」「リーダーシップ」との間で相関関係がみられ、また、「状況コントロール」との間で相関関係がみられなかったことがある。「状況対応」とは、状況に応じて能力を使い分ける統制力のことであるが、「状況コントロール」においては、自分を変えていける能力をも必要とされている。居場所のあるもののアイデンティティの基礎にはこの能力との関係がみられたが、おそらくは自我感情あるいはアイデンティティを獲得するための素質と何らかの関係があるのではないかということが考えられた。

6. アイデンティティの確立に影響を与える要因について

(1) 居場所のあるものの場合

居場所のあるものの「アイデンティティの確立」に影響を与える要因を分析するために、重回帰分析による偏回帰係数の検定をした。また、居場所については、今実際に持っている居場所（現実）のみを分析対象とした。結果は表10に示した。

まず、それぞれの居場所との関係では、「受容される居場所 ($t(186) = 2.821, p < .01$)」が1%水準で有意であり、「成長できる居場所 ($t(186) = 2.051, p < .05$)」が5%水準で有意であった。

次に、情動知能との関係では、「対人コントロール ($t(186) = -2.134, p < .05$)」「状況コントロール ($t(186) = 2.389, p < .05$)」が5%水準で有意であった。

また、「時間的連続性 ($t(186) = 3.484, p < .001$)」との関係は、0.1%水準で有意であった。

以上のことから、「受容される居場所」「成長できる居場所」「状況コントロール」「時間的連続性」は、「アイデンティティの確立」尺度に正の影響を与える重要な要因であり、また、「対人コントロール」は負の影響を与える重要な要因であることが示唆された。また、「アイデンティティの確立」につながるものとしてのそれらの因子の重要性を二重に確認する意味も含めて、次項

以降に共分散構造分析をすることとする。

表10 アイデンティティの確立に影響を与える要因(N=187)

アイデンティティ尺度	
アイデンティティの確立	
アイデンティティ尺度	
アイデンティティの確立	
アイデンティティの基礎	6.06
居場所条件尺度	
受容される居場所(現実)	2.82 **
1人になれる居場所(現実)	-1.04
成長できる居場所(現実)	2.05 *
安心できる居場所(現実)	1.75
EQS	
自己洞察	1.27
自己動機づけ	1.76
自己コントロール	0.70
共感性	1.25
愛他心	-1.17
対人コントロール	-2.13 *
状況洞察	1.50
リーダーシップ	1.77
状況コントロール	2.39 *
時間的連続性尺度	
時間的連続性	3.48 ***

※数値はPearsonの積率相関係数である。***p<.001, **p<.01, *p<.05

(2) 居場所のないものの場合

居場所のないものの「アイデンティティの確立」に影響を与える要因を分析するために、重回帰分析による偏回帰係数の検定をした。また、居場所については、居場所(理想)が分析対象である。結果は表11に示したが、「アイデンティティの基礎」「受容される居場所」「1人になれる居場所」「成長できる居場所」「安心できる居場所」「情動知能」「時間的連続性」は、いずれも有意水準には入らなかった。

表11 アイデンティティの確立に影響を与える要因(N=16)

アイデンティティ尺度	
アイデンティティの確立	
アイデンティティ尺度	
アイデンティティの確立	
アイデンティティの基礎	1.23
居場所条件尺度	
受容される居場所(現実)	-0.78
1人になれる居場所(現実)	0.14
成長できる居場所(現実)	0.74
安心できる居場所(現実)	-1.43
EQS	
自己洞察	1.53
自己動機づけ	1.14
自己コントロール	-0.23
共感性	-0.58
愛他心	-0.91
対人コントロール	0.98
状況洞察	-0.84
リーダーシップ	0.58
状況コントロール	-0.34
時間的連続性尺度	
時間的連続性	0.39

※数値はPearsonの積率相関係数である。***p<.001, **p<.01, *p<.05

以上のことから、本結果からは、居場所のないものの「アイデンティティの確立」に影響を与える重要な要因は分からなかった。

7. アイデンティティの基礎に影響を与える要因について

(1) 居場所のあるものの場合

居場所のあるものの「アイデンティティの基礎」に影響を与える要因を分析するために、重回帰分析による偏回帰係数の検定をした。また、居場所については、今実際に持っている居場所（現実）のみを分析対象とした。結果は表 12 に示した。

まず、居場所との関係では、「1 人になれる居場所 ($t(186) = -3.079, p < .01$)」が 1%水準で有意であり、「受容される居場所 ($t(186) = 2.292, p < .05$)」が 5%水準で有意であった。

次に、情動知能との関係は、「状況コントロール ($t(186) = 3.349, p < .001$)」が 0.1%水準で有意であり、「愛他心 ($t(186) = -2.006, p < .05$)」「対人コントロール ($t(186) = 1.980, p < .05$)」が 5%水準で有意であった。

表12 アイデンティティの基礎に影響を与える要因(N=187)

	アイデンティティ尺度 アイデンティティの基礎
アイデンティティ尺度 アイデンティティの確立 アイデンティティの基礎	6.06
居場所条件尺度	
受容される居場所(現実)	2.29 *
1人になれる居場所(現実)	-3.08 **
成長できる居場所(現実)	1.41
安心できる居場所(現実)	1.70
EQS	
自己洞察	0.72
自己動機づけ	0.21
自己コントロール	-1.42
共感性	-0.52
愛他心	-2.01 *
対人コントロール	1.98 *
状況洞察	0.49
リーダーシップ	-0.21
状況コントロール	3.35 ***
時間的連続性尺度 時間的連続性	1.53

※数値はPearsonの積率相関係数である。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

以上のことから、「受容される居場所」「状況コントロール」「対人コントロール」は、「アイデンティティの基礎」尺度に正の影響を与える重要な要因であり、また、「1 人になれる居場所」「愛他心」は負の影響を与える重要な要因であることが示唆された。また、「アイデンティティの基礎」につながるものとしてのそれらの因子の重要性を二重に確認する意味も含めて、次項以降に共分散構造分析をすることとする。

(2) 居場所のないものの場合

居場所のないものの「アイデンティティの基礎」に影響を与える要因を分析するために、重回帰分析による偏回帰係数の検定をした。また、居場所については、居場所（理想）が分析対象である。結果は表 13 に示したが、「アイデンティティの確立」「受容される居場所」「1人になれる居場所」「成長できる居場所」「安心できる居場所」「情動知能」「時間的連続性」は、いずれも有意水準には入らなかった。

以上のことから、本結果からは、居場所のないものの「アイデンティティの基礎」に影響を与える重要な要因は分からなかった。

表13 アイデンティティの基礎に影響を与える要因(N=16)

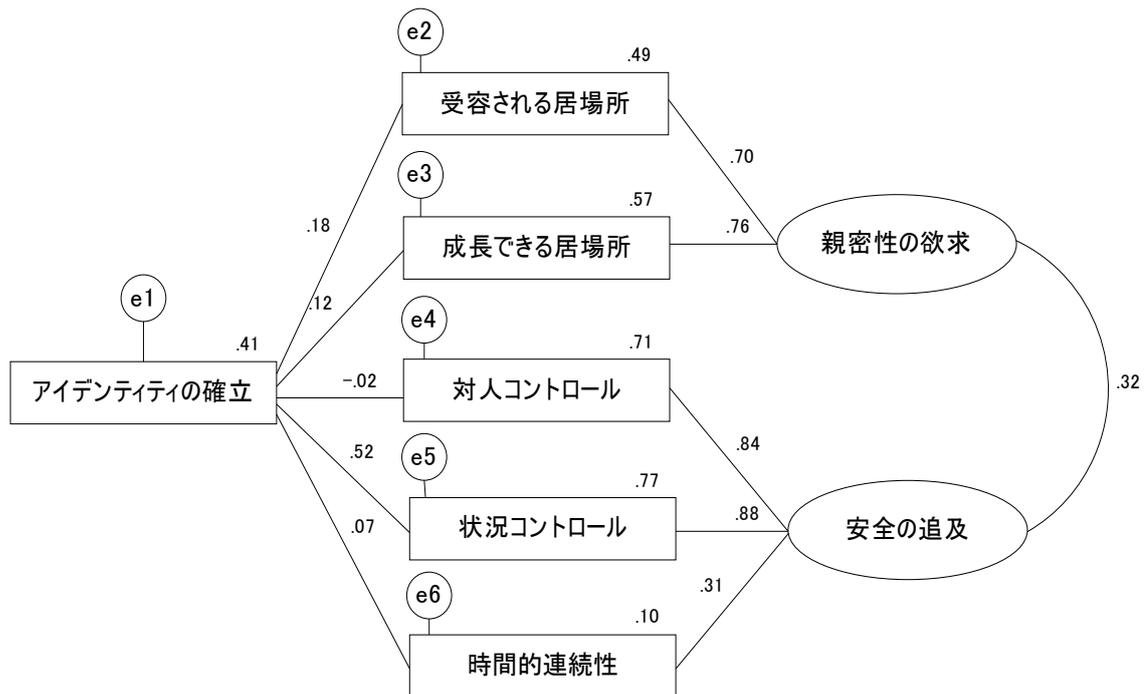
アイデンティティ尺度	
アイデンティティの基礎	
アイデンティティ尺度	
アイデンティティの確立	1.23
アイデンティティの基礎	
居場所条件尺度	
受容される居場所(現実)	-0.13
1人になれる居場所(現実)	-0.50
成長できる居場所(現実)	-1.10
安心できる居場所(現実)	-1.19
EQS	
自己洞察	-0.43
自己動機づけ	0.33
自己コントロール	-0.38
共感性	-0.13
愛他心	-0.41
対人コントロール	-0.04
状況洞察	0.22
リーダーシップ	0.44
状況コントロール	0.46
時間的連続性尺度	
時間的連続性	-0.55

※数値はPearsonの積率相関係数である。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

8. アイデンティティの確立との関係性のつながりについて

居場所のあるものの「アイデンティティの確立」との関係性のつながりを分析するために、共分散構造分析をした。また、居場所については、今実際に持っている居場所（現実）のみを分析対象とした。なお、分析のためのパス図は、重回帰分析による偏回帰係数の検定の結果を基にして作成した。その結果を図 1 に示した。 χ^2 乗値 ($\chi^2(4) = 0.204, p > .05$) は有意水準には入らず、また、RMR = 12.761, GFI = .989, AGFI = .943 であったことから、モデルの適合性は高いと判断された。

よって、「アイデンティティの確立」には、「受容される居場所」「成長できる居場所」「対人コントロール」「状況コントロール」「時間的連続性」が関係しており、また、それらとの関係性があるものとして、「親密性の欲求」「安全の追求」という 2 つの潜在変数を設定することとした。なお、「対人コントロール」については、標準化係数が負の値である。



数値は、標準化係数と重相関係数の平方である。

図 1 アイデンティティの確立との関係性のつながり(N=187)

本研究においては、「アイデンティティの確立」とは、自己の主体性や自己への信頼が形成されていることと定義している。

また、「受容される居場所」とは、自分の本音を出せて、ありのままの自分が認められ、本気になってくれる人がいる居場所であり、「成長できる居場所」とは、同じ目標を持ち、一緒に成長できる人がいる居場所である。

また、「対人コントロール」とは、他者の能力を生かす力、えり好みせず人間関係を作る力、自分の利益を後回しにする力であり、「状況コントロール」とは、状況の適切な認識に基づいて臨機応変の処置ができ、また自分を変えていくことができる能力である。

また、「時間的連続性」とは、どれぐらい先までの時間的連続性上に自己を位置づけているのかを測定したものであり、少し先の未来に自己を位置づけられる能力の有無を見たものである。

よって、「アイデンティティの確立」には、「受容される居場所」「成長できる居場所」といった対人交流が求められるような居場所が関係しており、また、「状況コントロール」といった状況に応じて自己を変容させる能力、「時間的連続性」といった少し先の未来に自己を位置づけられる能力が関係していることが示唆された。

また、大学生の発達課題として、両親以外の他者と親密な関係を持てるように成長していくといった「親密性」が求められる。そして、それへの欲求があることが対人交流を求められるような居場所を欲することと関係してい

るのではないかと考えられた。そして，人間は対人関係における情緒的不安を回避し，「安全」を追求することによって自己を形成するとされている。そのため，安全を追及することが状況に応じて自己を変容させたり，少し先の未来に自己を位置づけさせたりする能力と関係しているのではないかと考えられた。

9. アイデンティティの基礎との関係性のつながりについて

居場所のあるものの「アイデンティティの基礎」との関係性のつながりを分析するために，共分散構造分析をした。また，居場所については，今実際に持っている居場所（現実）のみを分析対象とした。なお，分析のためのパス図は，重回帰分析による偏回帰係数の検定の結果を基に作成しており，図2に示した。その結果，識別されない係数などがあったことから，モデルは不適合と判断された。

以上のことから，本結果からは，「アイデンティティの基礎」との関係性のつながりは解明できなかった。

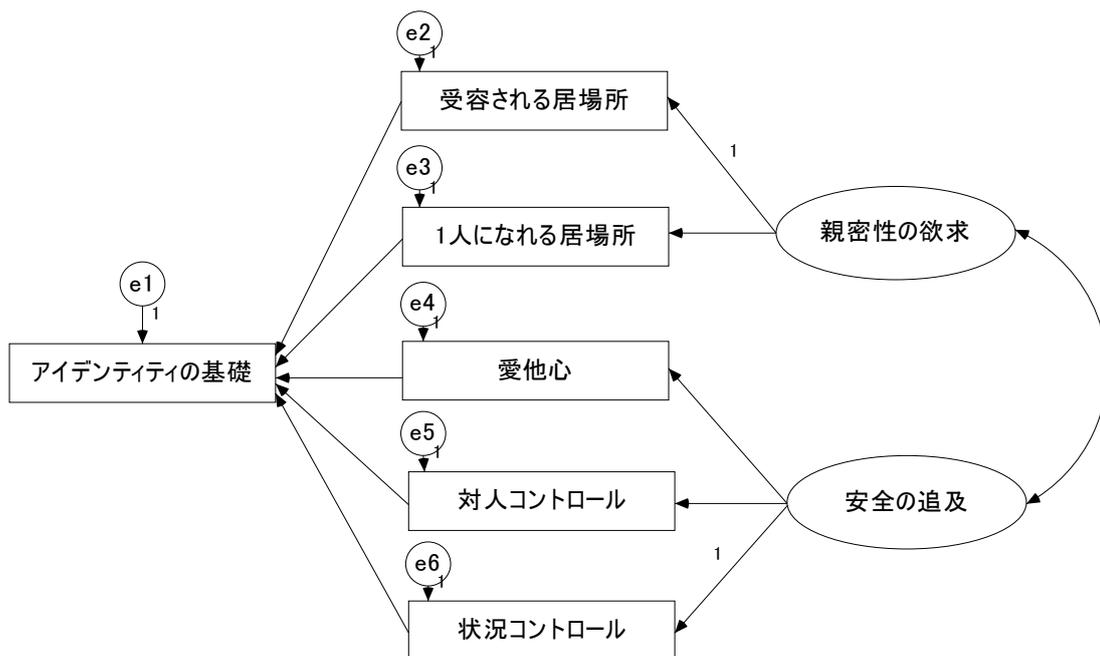


図2 アイデンティティの基礎との関係性のつながりのパス図(N=187)

第5章 総合考察

第1節 本研究のまとめ

第1項 アイデンティティと居場所との関係から

本研究の目的の一つは、青年期における自己形成に「居場所」がどう関わっているかを調べるために、青年期の発達課題であるアイデンティティの獲得との関係を見ることであった。

本研究の結果からは、居場所のあるものは、居場所のないものと比較して有意にアイデンティティを確立しており、また、アイデンティティの基礎となる気持ちも持っていることが分かった。また、居場所のあるものは、「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった対人交流が求められるような居場所を理想としており、そして、実際にもそれらの居場所を持っていることが分かった。しかし、居場所のないものは、「1人になれる居場所」といった対人交流が求められないような、むしろ他者などの環境から避難する場所としての居場所を理想としていた。

大学生の発達課題として「親密性」が求められるが、親密性への欲求があることが「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった対人交流を求められるような居場所を欲することと関係しているのではないかと考えられた。Sullivan (1953)によると、「親密性」とは、個人的価値のあらゆる構成成分の妥当性吟味を許し合う、協力する2人の人間を含む型の対人の場のことである。また、この時期の親密欲求 (need for intimacy) は非常に強力であるため、恐怖や不安のために対人関係の場から退いてしまう者も孤独感にせきたてられて対人関係を結ぶとされている。

実際のところ、居場所のあるものの「アイデンティティの確立」には、「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった対人交流を求められるような居場所が関係していた。その一方で、居場所のないものの「アイデンティティの確立」に関係する要因は分からなかったが、恐怖や不安のために対人関係の場から退いているのかもしれないこと、または、孤独と親和的なパーソナリティの持ち主であるのかもしれないことが考えられた。

本研究では、居場所がないとしたものは16名であり、有効回答者数の7.9%であった。分析結果があまり出なかったことから、多くのことは示唆できないが、居場所があるとしたものと比較して、有意にアイデンティティは確立しておらず、また、情動知能を構成する能力や技能も高くはなかった。そして、少なくとも学校には来ていたことから、物理的状況としての居場所はあるといえるが、しかし、心理的要因としての居場所は持っていない。それについては、対人関係がうまく持てないためにそうなっているのかもしれないということが考えられた。

第2項 情動知能との関係から

本研究の目的の一つは、アイデンティティと居場所との関係を検討し、そ

して、対人関係能力である情動知能との関係を検討することであった。

本研究の結果からは、居場所のあるものは、居場所のないものと比較して有意に情動知能を構成する能力や技能があることが分かった。また、居場所のあるものの「アイデンティティの確立」には、「状況コントロール」が関係していることが分かった。そして、居場所のないものは、「1人になれる居場所」といった対人交流が求められないような、むしろ他者などの環境から避難する場所としての居場所を理想としており、高くはない情動知能との関係が伺えた。

Sullivanによると、自己組織（self system）は、対人関係における情緒的不安を回避し、「安全」を追求しようとすることから形成される。安全の追求には「健康な安全操作」と「不健康な安全操作」があるが、健康な安全操作とは、対人的及び情緒的適応を妨げずに不安を排斥し、安心を獲得するというものであり、社会的有効性と情緒的安定性を増すことにもつながるとされている。その一方で、不健康な安全操作とは、ある程度の犠牲を払って不安を減少させるというものであり、対人関係の微妙な歪みやある種の情緒的苦悩を誘発させることにもつながるとされている。

さて、「状況コントロール」とは、状況の適切な認識に基づいて臨機応変の処置ができ、また自分を変えていくことができる能力のことである。この能力は、居場所のあるものの「アイデンティティの確立」にも関係していたことから、社会的有効性と情緒的安定性を増すことにつながるものとして、健康な安全操作の一つである「昇華」として考えることもできるのかもしれない。実際のところ、頑なに自分というものに固執して状況に応じた処置ができないよりは、状況に応じて自分を変えていける能力があるほうが社会適応上もよいということがいえそうである。また、1人でいることが社会適応上よいことであるともいえそうにない。

本研究では、アイデンティティと居場所、そして、情動知能との関係を明らかにすることを目的の一つとしたが、分析結果からは、「アイデンティティの確立」には「状況コントロール」が関係していることが示唆された。ただし、居場所との関係を詳細に分析してみることも今後の研究として必要ではないかと考えられた。

第3項 時間的連続性との関係から

本研究の目的の一つは、アイデンティティと居場所との関係を検討し、そして、情動知能との関係を検討することであったが、独自に作成した心理尺度によって、「時間的連続性」を測定し、それとの関係も検討した。

本研究の結果からは、居場所のあるものと居場所のないものとは同程度の時間的連続性上に位置していたが、しかし、居場所のあるものの「アイデンティティの確立」には、「時間的連続性」が関係していることが分かった。

さて、「時間的連続性」とは、大学生がどれぐらい先までの時間的連続性上に自己を位置づけているのかを見たものであり、そして、少し先の未来に自

己を位置づけられる能力と定義した。この能力は、居場所のあるものの「アイデンティティの確立」にも関係していたことから、社会的有効性と情緒的安定性を増すことにつながるものとして、健康な安全操作の一つである「昇華」として考えてもよいのかもしれない。実際のところ、過去と現在にしか自己を位置づけられないよりは、少し先の未来に自己を位置づけられる能力があるほうが目的を持って現在を生きることができるのではないかということがいえそうである。そして、居場所のあるものは、「成長できる居場所」といった、同じ目標を持ち、一緒に成長できる人がいる居場所を理想としており、現実にも持っていたが、その「成長」との関係も伺えた。

本研究では、アイデンティティと居場所、情動知能、そして、時間的連続性との関係を明らかにすることを目的の一つとしたが、分析結果からは、「アイデンティティの確立」には「時間的連続性」が関係していることが示唆された。ただし、居場所と情動知能との関係を詳細に分析してみることも今後の研究として必要ではないかと考えられた。

第2節 今後の展望と課題

本研究では、大学生は相応に青年期の発達課題を達成していることが示唆されたといえそうである。また、「アイデンティティの獲得」と居場所、情動知能、時間的連続性との関係も明らかにすることができた。ただし、居場所のないものについては、人数が少なかったこともあり、明確な結論が出しにくいことから、被験者数を増やす必要があると考える。そして、居場所のないものは、恐怖や不安のために対人関係の場から退いているのかもしれないこと、または、孤独と親和的なパーソナリティの持ち主であるのかもしれないことが考えられたため、何らかの手当てが必要であるのかもしれないことが考えられた。

また、本研究からは、大学生の「アイデンティティの確立」には、「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった対人交流が求められるような居場所が関係していることが分かった。そのため、大学生にはそれらの特徴を踏まえた居場所を持つことが必要であるといえることができる。そして、それは「居場所づくり」の重要性が示唆されたということでもある。

そのため、今後の研究においては、居場所のないものの居場所づくりへの取り組みをも視野に入れた研究をしていくことが必要ではないかと考えられた。また、そうすることによって、居場所のないものへの具体的な手当ての方策の考案にもつながる取り組みとしての研究が可能となるのではないかと考えられた。また、現在では、大学中途退学者・留年者の問題が表面化しているが、青年期の居場所研究は、それらの人への「居場所づくり」や「人間的成長」を手助けするための研究にも発展させられるのではないかとと思われる。

要約

青年期の多くの時間が「学生」として過ごされることから、青年期の自己形成の研究において、学校を含めた「居場所」の研究がされるようになってきた。そこで、本研究においては、青年期における自己形成に「居場所」がどう関わっているかを調べるために、青年期の発達課題である「アイデンティティの獲得」との関係を見ることを目的とした。また、アイデンティティの獲得には、対人関係能力が必要であることから、「情動知能」との関係を見ることも目的とした。そして、独自に作成した質問項目によって、少し先の未来に自己を位置づけられる能力であるとする「時間的連続性」との関係も見ることとした。

調査においては、有効回答者数は 203 名（男性 59 名，女性 144 名：平均年齢 20.29 歳，SD=1.14）であり，有効回答率は 68.6%であった。分析にあたっては，居場所が「ある」「どちらかといえばある」と回答した 187 名と居場所が「どちらかといえばない」「ない」と回答した 16 名のグループに分類して，比較検討をした。

結果からは，居場所のあるものは，居場所のないものと比較して有意に「アイデンティティの確立」がされており，「アイデンティティの基礎」となる気持ちも持っていた。また，「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった対人交流が求められるような居場所を理想としており，現実にもそれらの居場所を持っていた。そして，「情動知能」を構成する能力や技能も有意に持っていることが分かった。また，本研究からは，居場所のあるものの「アイデンティティの確立」には，「受容される居場所」「成長できる居場所」「状況コントロール」「時間的連続性」が関係していることを明らかにすることができたが，それには，青年期の発達課題でもある「親密性の欲求」や「安全の追求」が関係しているのではないかと考えられた。

その一方で，居場所のないものの分析結果はあまり出ておらず，今後は被験者数を増やす必要があると考えられた。また，大学の中途退学者や留年者の問題が表面化しているが，青年期の居場所研究は，それらの人への「居場所づくり」や「人間的成長」を手助けするための研究に発展させられるのではないかと考えられた。

謝辞

本研究にあたって、「居場所条件尺度」の使用を快く許可してくださいました大阪教育大学の白井利明先生ならびにその仲介をしてくださった本学の小林芳郎先生に感謝を申し上げます。

また、アンケート調査を実施する場を提供してくださった吉田初恵先生ならびに統計処理に関してご指導をしてくださった美濃哲郎先生，アンケート調査にご協力してくださいました学生の皆様に感謝を申し上げます。

そして，文献の提供から尺度の選定，考察などまで，本研究の全般においてご指導を続けてくださいました栗村昭子先生に感謝を致します。

引用・参考文献

- 上里一郎（監）白井利明（編）（2005）：シリーズ こころとからだの処方箋
④ 迷走する若者のアイデンティティフリーター，パラサイト・シングル，ニート，ひきこもりー ゆまに書房
- 安香 宏（1979）：発達臨床の基礎理論（2） 藤永 保・三宅和夫・山下栄一（編） テキストブック心理学（7） 臨床心理学 有斐閣ブックス pp.32-40.
- 氏原 寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕（編）（2004）：心理臨床大事典 培風館
- 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子（2001）：EQS マニュアル 実務教育出版
- Erikson, E.H. (1959) : Identity and the life cycle New York : W.W.Norton Company (Reissue, 1980)
- Erikson, E.H. (1973) : 同一性対同一性拡散 小此木啓吾（編）小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子（訳） 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 pp.111-118.
- Erikson, E.H.,& Erikson, J.M. (2001) : 青年期と学童期 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳） ライフサイクル，その完結〈増補版〉 みすず書房 pp.96-103.
- 大竹恵子・島井哲志・内山喜久雄（2002）：IQを超えるEQとは 新しい情動知能尺度（EQS：エクス）の提案 教育と医学，50，76-82.
- 小此木啓吾（1978）：モラトリアム人間の時代 モラトリアム人間の時代 中央公論社 pp.8-75.
- 小此木啓吾・深津千賀子・大野 裕（編）（2004）：改訂 心の臨床家のための 精神医学ハンドブック 創元社
- 小沢一仁（1998）：青年の居場所から見たアイデンティティ 日本青年心理学会大会発表論文集，6，32-33.
- 小沢一仁（2002）：居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東京工芸大学工学部紀要，25，30-40.
- 小沢一仁（2003）：居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと 東京工芸大学工学部紀要，26，64-75.
- 笠原 嘉・山田和夫（編）（1981）：キャンパスの症状群—現代学生の不安と葛藤— 弘文堂
- 勝見吉彰（2004）：アパシー・無気力と自己愛の障害 上地雄一郎・宮下一博（編） シリーズ 荒れる青少年の心 もろい青少年の心—自己愛の障害—発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp.68-74.
- 加藤正明・保崎秀夫・三浦四郎衛・大塚俊男・浅井昌弘（監）飯森眞喜雄・内山 真・大野 裕・鹿島春雄・濱田秀伯・宮川香織・山田光彦（編）（2006）：精神科ポケット辞典[新訂版] 弘文堂 pp.132.

- Gardner, H. (1983) : The theory of multiple intelligence New York : Basic Books
- Gumbiner, J. (2003) : adolescent development Adolescent Assessment Wiley pp.18-53.
- 北山 修 (1993) : 北山 修著作集 日本語臨床の深層 第3巻 自分と居場所 岩崎学術出版社
- 北山 修・斎藤 環・渡辺 健・武藤清栄 (2001) : 座談会 ひきこもりについて 武藤清栄・渡辺 健 (編) 現代のエスプリ 403 ひきこもり至文堂 pp.5-34.
- 北山 修 (2003) : 自分の居場所—精神分析理論と臨床— 住田正樹・南 博文 (編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 pp.21-37.
- 久世敏雄・齋藤耕二 (監) 福富 護・二宮克美・高木秀明・大野 久・白井利明 (編) (2000) : 青年心理学事典 福村出版 pp.285.
- Goleman, D. (1998) : 土屋京子 (訳) EQ—こころの知能指数 講談社
- 齋藤憲司 (2005) : 大学生の無気力 大芦 治・鎌原雅彦 (編) シリーズ荒れる青少年の心 無気力な青少年の心—無力感の心理—発達臨床心理学的考察 北大路書房 pp.87-98.
- 齋藤 環 (2005) : 「ひきこもり」の比較文化論 「負けた」教の信者たち ニート・ひきこもり社会論 中央公論新社 pp.39-96.
- 佐藤有耕 (2001) : アイデンティティ尺度 掘 洋道 (監) 山本真理子 (編) 心理測定尺度集 I —人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉—サイエンス社 pp.91-94.
- Sullivan, H.S. (1990) : 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏞幹八郎 (訳) 精神医学は対人関係論である みすず書房
- Salovey, P., Mayer, J.D., & Caruso, D. (2002) : The positive psychology of emotional intelligence Snyder, C.R., & Lopez, S.J. (Eds.) Handbook of positive psychology Oxford University Press pp.159-171.
- 下山晴彦 (1986) : 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- 下山晴彦 (1992) : 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 下山晴彦 (1995) : 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, **43**, 145-155.
- 下山晴彦 (1995) : スチューデント・アパシーの下位分類の研究 東京大学大学院教育学研究科紀要, **35**, 159-185.
- 下山晴彦 (1996) : スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, **44**, 350-363.
- 下山晴彦 (2002) : アパシー性人格障害 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 4 異常心理学Ⅱ 東京大学出版会 pp.83-103.

- Schultz, D. (1982): 上田吉一・中西信男・古市裕一(訳) 健康な人格 人間の可能性と七つのモデル 川島書店
- 白井利明 (1992): 現代青年の時間的展望の構造 (3) —時間的展望と時間的指向性の関連— 青年心理学研究, **4**, 1-8.
- 白井利明 (1998): 学生は居場所をどうとらえているか—自己受容とセルフ・エスティームとの関連— 日本青年心理学会大会発表論文集, **6**, 34-35.
- 白井利明 (1998): 若もの・心もよう⑩ 若者に居場所はあるのか 大学進学研究, **108**, 54-59.
- 白井利明 (2005): 時間的展望の視点から 教育心理学年報, **44**, 9-10.
- 白井利明 (2006): 現代社会における青年期の不安と自己—進学競争のもとでの時間的展望— 心理科学, **26**, 13-25.
- 鈴木乙史 (2003): 人間のライフサイクル 梅本堯夫・大山 正(監) 新心理学ライブラリ 9 性格心理学への招待[改訂版] サイエンス社 pp.96-109.
- 高石恭子 (2006): ひきこもりの過去と現在 海保博之(監)伊藤美奈子(編)朝倉心理学講座 16 思春期・青年期臨床心理学 朝倉書店 pp.103-117.
- 谷 冬彦 (1998): 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, **9**, 35-44.
- 田端純一郎 (2004): アイデンティティの形成と病理 西川隆蔵・大石史博(編) 人格発達心理学 ナカニシヤ出版 pp.103-116.
- 都筑 学 (1982): 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73-86.
- 都筑 学 (1984): 青年の時間的展望の研究 大垣女子短期大学研究紀要, **19**, 57-65.
- 都筑 学 (1993): 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.
- 都筑 学 (1998): 青年心理学から見た「居場所」の問題 日本青年心理学会大会発表論文集, **6**, 30-31.
- 土居健郎 (2000): 自我の心理 土居健郎選集 1 岩波書店 pp.1-39.
- Mayer, J.D.,&Salovey, P. (1997): What is emotional intelligence Salovey, P.,&Sluyter, D.J. (Eds.) Emotional development and emotional intelligence Basic Books pp.3-31.
- Mayer, J.D. (2005): 情動知能フィールドガイド Ciarrochi, J.,Forgas, J.P.,& Mayer, J.D. (編) 中里浩明・島井哲志・大竹恵子・池見 陽(訳) エモーショナル・インテリジェンス 日常生活における情動知能の科学的研究 ナカニシヤ出版 pp.3-30.

資料

大学生のアイデンティティと居場所のアンケートについてのお願い

この調査は、大学生のアイデンティティと居場所の関係について調べようとするものです。

質問をよく読んで、各回答欄にご記入をお願いします。一つでも記入漏れがありますとせっかくご協力を頂いたアンケートが有効に使えなくなってしまいますので、全質問項目へのご回答をお願いします。

結果は統計的に処理しますので個人のプライバシーは守られます。ご協力をお願いします。

関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科
心理臨床学専攻 栗村ゼミ
M2 吉川満典

こちらにもご記入をお願いします。

学科名：() 学年：()

年齢：() 性別：()

〈研究Ⅰ〉

あなたは、何年後の自分まで想像できますか。次の（ ）のなかに記入してください。

（ ）年後の自分までは想像できる。

〈研究Ⅱ〉

以下の文章を読み、それが自分の状態にどの程度当てはまっているかを下記の4段階からひとつ選び、回答して下さい。考え込まずに、直感的に感じたまま答えを選んで、次の項目に進んでください。

	よく 当ては まる	ど ち は ま ら か と い え ば	ど ち は ま ら か と い え ば	い 全 く 当 て は ま ら な
1. 私は、興味を持ったことはどんどん実行に移していく方である。	1	2	3	4
2. 私は、やりそこないをしないかと心配ばかりしている。	1	2	3	4
3. 自分の生き方は、自分で納得のいくものである。	1	2	3	4
4. 私の心は、とても傷つきやすく、もろい。	1	2	3	4
5. 私は、十分に自分のことを信頼している。	1	2	3	4
6. 異性とのつきあい方がわからない。	1	2	3	4
7. 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる。	1	2	3	4
8. 何かしているより空想に耽 ^{ふけ} っていることが多い。	1	2	3	4
9. 自分は、何かをつくりあげることのできる人間だと思う。	1	2	3	4
10. 私は、人がみているとうまくやれない。	1	2	3	4
11. 社会の中での自分の生きがいが増えてきた。	1	2	3	4
12. 私は、どうしたらよいかわからなくなると自分の殻の中に閉じ込めてしまう。	1	2	3	4
13. 自分にまとまりが出てきた。	1	2	3	4

	よく 当ては まる	ど ち ら か と い え ば	ど ち ら か と い え ば	い 全 く 当 て は ま ら な
14. 自分一人で初めてのことをするのは不安だ。	1	2	3	4
15. 私は、自分の個性をととても大切にしている。	1	2	3	4
16. まわりの動きについていけず、自分だけとり残されたと感じることがある。	1	2	3	4
17. 私は、自分なりの価値観を持っている。	1	2	3	4
18. 私は、人と活発に遊べない。	1	2	3	4
19. 私は、魅力的な人間に成長しつつある。	1	2	3	4
20. 自分の中には、常に漠然 ^{ぼくぜん} とした不安がある。	1	2	3	4

	全然 そう では ない	ほと んど そう では ない	いど ちら とも いえ ない	だか なり その とお り	ま つ た く その とお り
9. 1人である。	1	2	3	4	5
10. 人の悩みをよく聴いている。	1	2	3	4	5
11. 人から指図を受ける。	1	2	3	4	5
12. 自分のすべてを受け入れてもらえる。	1	2	3	4	5
13. 何でも本音で話しあう。	1	2	3	4	5
14. 周りに誰もいないと落ち着く。	1	2	3	4	5
15. 一緒になって打ち込める事がある。	1	2	3	4	5
16. 人の目を気にする。	1	2	3	4	5
17. 何も批判がましいことを言われない。	1	2	3	4	5
18. 常に緊張している。	1	2	3	4	5
19. 規則がない。	1	2	3	4	5
20. 人の干渉を受けない。	1	2	3	4	5
21. 人と関わらなくてもよい。	1	2	3	4	5
22. 自分のことを本気で叱ってくれる。	1	2	3	4	5

〈3-4〉

あなたの求める居場所の条件として、次の項目はどの程度あてはまりますか、次の数字のいずれかに○をつけてください。理想で答えてください。

	全然 そう では ない	なほ い と ん ど そ う で は	い ど ち ら と も い え な	だ か な り そ の と お り	り ま つ た く そ の と お
1. お互いに成長しあえる。	1	2	3	4	5
2. 無条件に愛される。	1	2	3	4	5
3. 気兼ねをせずにけんかができる。	1	2	3	4	5
4. 1人になると心の安らぎが得られる。	1	2	3	4	5
5. 同じ目標を持つ人がいる。	1	2	3	4	5
6. 何から何まで話さなければ伝わらない。	1	2	3	4	5
7. ありのままの自分が認められる。	1	2	3	4	5
8. 自分が落ち込んでいる時に、共感してくれて私を元気づけてくれる。	1	2	3	4	5
9. 1人である。	1	2	3	4	5
10. 人の悩みをよく聴いている。	1	2	3	4	5
11. 人から指図を受ける。	1	2	3	4	5
12. 自分のすべてを受け入れてもらえる。	1	2	3	4	5
13. 何でも本音で話しあう。	1	2	3	4	5
14. 周りに誰もいないと落ち着く。	1	2	3	4	5
15. 一緒になって打ち込める事がある。	1	2	3	4	5
16. 人の目を気にする。	1	2	3	4	5

	全然 そう では ない	ほと んど そう では ない	いど ちら とも いえ ない	だか なり その とお り	ま つ た く その とお り
17. 何も批判がましいことを言われたい。	1	2	3	4	5
18. 常に緊張している。	1	2	3	4	5
19. 規則がない。	1	2	3	4	5
20. 人の干渉を受けない。	1	2	3	4	5
21. 人と関わらなくてもよい。	1	2	3	4	5
22. 自分のことを本気で叱ってくれる。	1	2	3	4	5